

# 茨城県図画工作・美術教育研究部研究調査委員会 授業実践研究報告（令和元年8月）

研究テーマ	生徒が目標を明確に持ち、主体的に制作に取り組む授業の工夫 —中学校第1学年「身近な人を見つめて～友達再発見～」の実践を通して—
-------	--

日立市立久慈中学校 教諭

## I 研究テーマについて

「表現」は、生徒自らが感じ取ったこと、思い描いたこと、考えたこと、伝えたいことなどを基に、生徒自らが表したいことを心の中に強く思い描き、より美しく創造的に、そして心豊かに表現する活動を通して、「発想や構想に関する資質能力」と「創造的に表す技能」を身に付ける学習である。そのためには、生徒一人一人の表現欲求を大切にしながら、自ら課題を決定し、答えを求めて取り組む喜びを味わえるようにすることが重要である。

生徒が自分の課題を決定するためには、題材をきちんと理解し、それぞれが考えを深め主題を明確に持つことができるようするための工夫が必要である。主題を持つとは、表現したいことを一人一人が強く心に思い描くことであり、表現したい主題が明確であれば、「やってみたい」という意欲を持ちやすい。意欲を持つことで生徒の取り組みが主体的になるとを考えた。また、制作の中で試行錯誤し、充実感のある楽しさを味わうことができるよう、活動内容や学習形態に変化をつけ、生徒の意欲を引き出し主体的に学びに向かうことができるよう工夫した。

## II 研究の実際

### 1 題材名 身近な人を見つめて～友達再発見～

### 2 題材の目標

- 友達とよく話し合い、友達の性格や良さについて考える活動を通して、「友達らしさ」を捉え、工夫して表現しようとする。
- 「友達らしさ」を表すためのポーズや表情を工夫するとともに、それを表現するための構図の効果を感じることができる。
- 友達のポーズや表情を捉えると共に、人体の比率をとらえ写実的な表現をすることができる。
- パステルを効果的に使用し、友達らしい色彩を工夫するとともに、混色や重職の効果を生かして立体感や質感・陰影を工夫し生き生きとした友達の姿を表現しようとする。
- 自分の作品を振り返り、表情やポーズの効果について考えるとともに、友達の作品を鑑賞し、その工夫や良さを感じ取ることができる。

### 3 題材について

#### (1) 児童（生徒）の実態

学習に関するアンケートより、生徒は学習に意欲を持って取り組んでおり、美術の授業でも一生懸命に制作に取り組もうとする様子が見られる。しかし、授業の課題の理解や学習の見通しになると徐々に数字が下がる。1学期の取り組みを振り返ると、制作の進度差が出やすく、課題を終わることができなかつたり、必要な活動にきちんと取り組めないまま課題を終えてしまったりする生徒が20%程度いた。そのため、その時間に達成したい課題を十分に理解して取り組むことができるようにすれば、生徒の意欲を生かすことができるのではないかと考えた。また、友達と関わり合いながら授業に取り組むことが良くてできていることから、進度差を少なくし全員で同じ課題に取り組むことができるようになることで課題への理解をより高め、効果的な取り組みができると考えた。

【学習に関するアンケートより】

質問項目	よく当たる	かせい当たる
意欲的に授業に取り組んでいますか	40.5%	43.2%
何ができるようになればよいか分かった上で授業に取り組んでいますか	35.1%	54.1%
授業の中で問題や課題を解決するための見通しを持って学ぶことができていますか	27.0%	56.8%
友達と関わり合いながら、授業に取り組んでいますか	54.1%	40.5%

また、1学期の色の学習の制作・作品の仕上がりから、生徒は混色や筆の使い方など基本的な絵の具の使い方についてはほとんどの生徒が身に付けていることが分かる。今回は混色による効果を作品に生かすことにポイントを絞り込むような展開を考えた。

【「色の学習」での生徒の様子】

アクリル絵の具を使い、混色により自分の作りたい色を作れた生徒	57.5%
枠からはみ出さずに着色することができた生徒	75.0%
水の量を調整して不透明に着色することができた生徒	35.0%

(2) 題材観

人物画は、小学校から幾度となく取り組んできた題材である。今回の友達再発見では写実的な表現に加えて、お互いについてよく話し合い、それぞれの良さや性格について考え、「人物の内面」を表現するという課題を設定した。そのためには、人柄を表現するためのポーズや表情の表現の工夫が必要である。描き合う友達と話し合い、自分の考えと友だちの考えをすり合わせ、ポーズや表情を決定していく。自分の考えだけでなく、相手の考えを取り入れることで、アイデアの幅を広げることができるようにしたい。

また、全身を描くことで、描くポーズの幅を広げ、個性的な表現ができるようにするとともに、全身の比率や描き方の基礎・基本の学習ができるようにする。今回の学習した人物の描き方の基本が3年生の自画像の表現に生かされるようにする。

(3) 指導観

写実的に絵を描く表現活動は、多くの生徒にとっては難しさが先に立ち、意欲を持ちにくい活動である。また、人物画は小学校から繰り返し扱われる題材でもあり、さらに意欲が持ちにくい題材である。今回は、友達と話し合いの時間を十分にとり、お互いにどのように描くか描いてほしいかを相談したうえで、制作を始める。自分だけの作品ではなく、お互いに一緒に描いていく意識を持たせることで、意欲を持続できるようにしたいと考えた。

また、活動内容に応じて学習の形態を変化させ、話し合う・集中して作業する・工夫するなど生徒の活動を意識的に変化させることで、最後まで飽きずに取り組むことができるようになる。それに合わせて課題を細分化し1時間ごとにスマールステップで進めていくことで、学習課題を明確に意識して取り組むことができるようになる。また、人物の表現に課題を絞り込み、背景の着色はそれぞれの進度に合わせて塗ったり塗らなかつたりすることで時間を調整する。そして、人物の制作に必要な時間を十分に確保することで、慌てさせず1つ1つの作業にじっくりと取り組むことができるようにならう。また、今回は、パステルを使用して着色する。混色・重色が容易にでき、消しゴムで修正することも

できることから、色の工夫に挑戦しやすく扱いやすい画材である。ほとんどの生徒が初めて扱う画材であることから、新鮮な気持ちで試行錯誤し、いろいろな挑戦をすることがで、充実感のある楽しさを味わうことができると考える。

#### 4 題材の評価規準

関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
友達とよく話し合い、友達のらしさについてテーマを持ち、工夫して表現しようとする。	友達らしさを表現するためのポーズや表情を考え、全体の構図を捉えた効果的な表現を工夫することができる。	人体の比率やバランスを捉えて友達を描く。 混色・重色の効果を生かして質感や立体感・陰影を意識した色彩表現をすることができる。	人物の内面の表現に着目して作品を鑑賞し、ポーズや表情の表現による効果について知ることができる。

#### 5 指導と評価の計画（12時間扱い）

時間	学習内容・活動	評価規準・【評価方法】
第1次 ②	友達の全身をスケッチする。	・体の形やバランスを捉えて全身を描くことができる。創【力作】
	人物画の鑑賞をする。	・ポーズや表情から表現されている人物像を考え、描かれた人物の気持ちや性格を表す題名をつけることができる。鑑【力作】 ・題名をつけた理由について絵の表現をもとにまとめることができる。鑑【力作】
第2次 ②	テーマ・構図を決める。 ①ペアになり、お互いのらしさについて話し合い、テーマを決める。 ③効果的な構図を考え、ラフスケッチをする。 ④描きたい構図で写真撮影をする。	・友達よく話し合い、パートナーの人物像について考えることができる。想【力作】 ・話し合った内容をもとに、表現したい友達の人柄や雰囲気について言葉で、まとめることができる。想【力作】 ・自分のテーマをもとに、効果的な構図を考え、描きたい友達の姿を捉えることができる。創【模・ラフスケッチ】
第3次 ②	写真をもとに下絵を描く ①全体を大まかな形で描く。 ②形を整える。 ③細部を描く。	・手順を追ながら作業を進め、人体の基本的な大きさの比率に従って下絵を描くことができる。創【能】
第4次 ②	パステルで手を描き、使い心地や使い方を知る。 背景の着色をする。	・パステルの使い心地を試しながら、いろいろな色を使って手を描くことができる。創【和風】 ・テーマに合わせて友達らしい色で着色することができる。想【幅】

第5次 ④	パステルで「肌」→「服」→「髪」の順に着色をする。	・混色による色の変化を付けながら、友達らしい配色を工夫で着色することができる。 創【幅】
第6次 ①	お互いの作品を鑑賞し、その良さや工夫を感じる。	・自分の表現について振り返り、工夫点や友だちの表現の良さを感じ取ることができる。 鑑【鑑カード】

## 6 指導の実際

### (1) 時間ごとの課題の明確化と学習形態の工夫

生徒のその授業でのゴールの姿を明確に示すことで、目的意識をもって取り組むことができるようとした。作業の内容を細かく分けて、やるべき課題を絞り込むようにした。

1時間ごとの生徒の目標	場所・学習形態
①友だちの姿をよく観察し、体の動きをスケッチをしよう。	机なし 座席順による2人組
②人柄や気持ちを表す題名を付けよう。	個別
③描きたい「友達らしさ」について考えよう。	机なし
④描きたい構図で友達の写真を撮ろう。	話し合いによる2人組
⑤写真をもとに構図を整えて全身を大まかに描こう。	個別
⑥細部を描き、下絵を完成させよう。	
⑦友だちらしい色を混色して背景に色をつけよう。	グループ
⑧パステルを使って混色し「手」を描いてみよう。	
⑨パステルの混色を工夫して肌色の部分を着色しよう。	
⑩パステルの良さを生かして友だちらしい色づいを工夫しよう。	
⑪作品の全体を見直して、細部の仕上げをしよう。	
⑫友達の表現したかった「らしさ」をみつけよう。	2人組

### (2) 課題を理解して主体的に取り組むための工夫

#### ① 導入での友達のスケッチ

導入時に、相手をじっくりと観察すること、体の動きを捉えて全身を描くことに課題を絞りスケッチを行う。集中して取り組むことができるよう時間を取り組ませる。生徒に難しさを感じさせることで、人体を描くための簡単な比率「頭×2=肩・手=顔」を作品に問い合わせることが必要と思えるように授業を展開した。

#### ② いろいろな人物画の鑑賞

ベン・シャーンのペン画・版画から、いろいろな表情・ポーズの作品を集めプリントを作成し、ポーズ・手の表情に注目させて題名をつけていく。描かれている人物の気持ちや人柄を感じるような題名を付けるようにすることで、表情やポーズによる人物の内面の表現についてじっくりと考えることができるようとした。人物のどの部分に注目して自分がその題名を付けたのか、根拠を説明することで、人物の表現の工夫を具体的に考えることができるようとした。

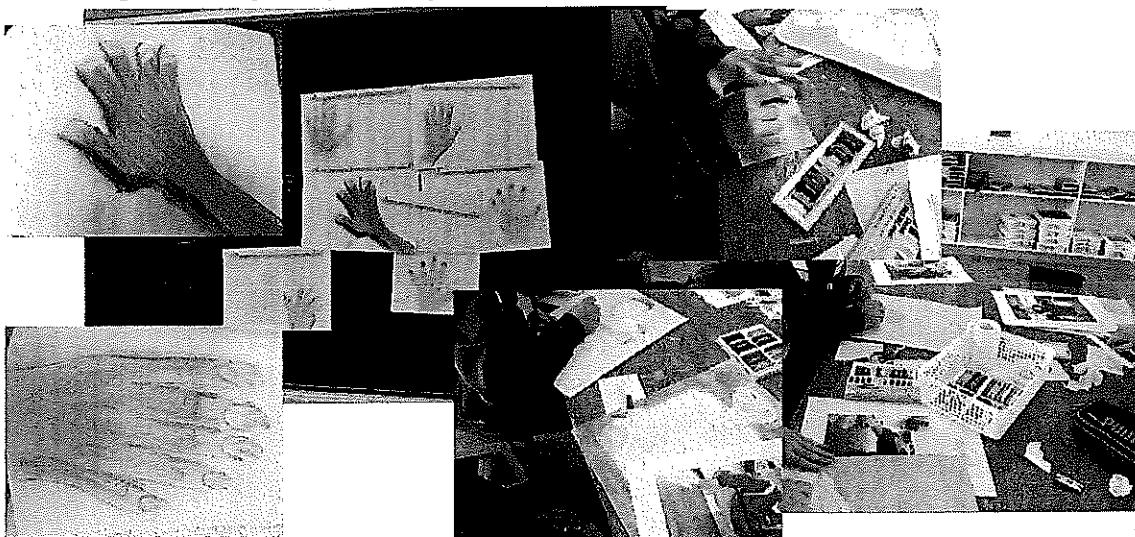
### ③ 実際の構図での写真撮影

テーマを決めて写真を撮るまでの活動の時間を長めに設定し、相談したり考えたりする時間を十分にとるようにした。スケッチをすることで、描いて感じをつかむことができるようになり、どのように友達を描くかのイメージをつかめるようにした。なかなか構図を決められない生徒も、写真を撮ることで、「構図を決める」活動を行うことができるようにし、1人1人の力に合わせた構図の決め方ができるように工夫した。

### ④ パステルによる着色

中学1年生では、形や色彩の性質や効果を理解することが課題となっている。今回の学習では、人物らしさを色彩で表現することを目標として、着色に取り組むことを考えた。色彩表現で工夫したいポイントを混色・重色に絞り込み、パステルを使用した。絵の具と違い準備に時間がかかるらず、画面上で容易に混色できることから生徒にとって使いやすい画材である。消しゴムで修正することも可能なため、思い切った表現にも挑戦しやすいと考えた。

はじめて使用する画材のため、作品の着色の前に練習の時間を作り、パステルの使い心地を試すことができるようとした。混色してみることを課題として、自分の手を描いた。色の工夫に重点をおき作業を進めるようにし、本番の着色時にいろいろな色の作品を見本として提示することで、自分とは違った色の工夫を見る能够性を高めることができるようにし、色の選択肢を広げた。ルノアールの作品を参考作品として印象派の豊かな色彩表現に触れることで、人物の生き生きとした表現について感覚的に知り、自分の表現に取り入れることができるようとした。



【手の練習】

## III 研究の成果と課題

### 1 成果

- 作業内容を細分化し、時間ごとの課題を明示することで、課題を理解して作業に取り組む様子が見られた。学習形態を変えることで、集中したり相談したりいろいろな活動を取り入れることができ、下絵の完成までは大きくずれることなく作業を進めることができた。その時間の課題をもとに振り返りの記入のしかたを指導することで、具体的な記述ができるように指導することができた。

- ベンシャーンの鑑賞を通して、ポーズや表情による人物像の変化に着目させることができた。表情やポーズによって描かれた人物の印象が変わってくることを感覚的に知ることで、友達を描くときの工夫のポイントを知ることができ、実際にテーマを決める時にも、いろいろなポーズを工夫する様子が見られた。
- 「描くような構図で写真を撮る」活動を通して、実際に写真を撮ってみせることで理解し、撮影を進めることができた。写真では構図をうまく捉えることができなかつた生徒も、写真を印刷後に、写真を折り曲げたり、部分を隠したりして構図の取り方や画面の使い方について個別の支援に活用することができた。
- 進度をそろえ、全員そろってパステルの着色の作業を始めることで、説明に集中して聞き入ったり、お互いに話し合ったりしながらパステルを使い始めることができた。
- 初めて使用するパステルでは、混色・重色が簡単にでき、手を使って作業を進めることに意欲的に取り組む姿が見られた。印象派の白の表現を参考作品として扱うことで、いろいろな色を使ったり変化させたりして表現できる色の美しさを知らせることができた。陰影の表現をや形・質感の表現を、色の変化を工夫して表現しようとする生徒が増えた。消しゴムで色を修正できることから、「やってみる」ことができるので、不安なく作業を進めていた。

## 2 課題

- 下絵の完成・着色の始めまでは進度差を調整したい同じ进度で進める事ができたが、着色が始まてからは进度差が大きくなつた。着色の手順や内容を細分化し、進める目安をつけながら进度の調整をしていきたい。また、今回は背景の着色をしないことで時間を調整したが、人物の着色についても評価の観点との関連を考え、肌色の着色に重点を絞り込むなど内容をスマート化していくようとする。作品の完成ではなく課題の達成を目指した活動ができるような展開を工夫たい。
- パステルの使用については、手の着色の練習では、混色の工夫を徹底できた。しかし、作品の着色では、肌色以外の部分の着色まで進むと、作業の時間が長くなり意欲の持続が難しい生徒が見られた。肌色以外の部分の着色について参考作品等の準備を進め、各部分の着色の仕方についてより具体的な指導ができるように準備しておきたい。
- 印象派の作品を参考作品とすることで「生き生きとした色彩表現」を感覚的に理解できるようにしたいと考えた。活動の様子から、混色を工夫しようと良く取り組む生徒が多くなつたが、効果的な表現までは到達しなかつた。生き生きとした色彩表現とは、具体的にどの部分のどのような表現なのか、生徒自身が作品から見取る活動を取り入れるなど、理解を深める工夫をしたい。

### ※参考資料

中学校学習指導要領（平成2.9年告示）解説 美術編（文部科学省）